

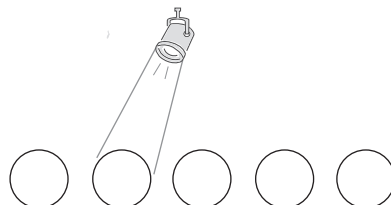
E 「は」と「が」のイメージ図

「は」はスポットライト

話者が話したいことにスポットライトを当てる。

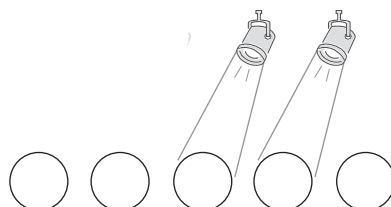
スポットライトを当てたあとに、述部でなんらかの説明を記述する。 → 説明文^{【3】}
 「は」は、複数のものの中から1つ〈選択〉して（取り立てて）主題^{【4】}として提示する。
 「は」と「も」は係助詞^{【5】}で、文を組み立てる役割を持つ。

例：姉は帰りました。



複数のものにスポットライトを当てていくと、〈対比〉になる。

例：夏は暑く、冬は寒い。



このため、「は」を使った文が続くとスポットライトがいろんなところに当たってしまい、主役（話したいテーマ）が何なのかわかりにくくなる。

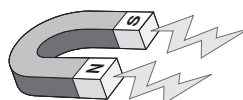
「が」は強力磁石

「が」の前の語と、後の語をくっつける。

「が」の直前の語（ガ格名詞句）は、述語（動詞、形容詞、名詞）と早くくっつきたい。
 「が」を使った文では、話者は一歩身を引いて、現象や状況を描写している。 → 現象文

例：会議が始まる。
 背が高い。

～が
 （ガ格名詞句）



～する／だ
 （述語）

このため、主語＋述語が入れ子になる「～が～が」構文では、主語と述語の関係が不明確になる（文意からしか判断できなくなる。最悪の場合、著者に問い合わせる必要がある）。「～が（主語1）～が（主語2）～する（述語2）～する（述語1）」という形式の「～が～が」構文の対処法としては「主語1と述語1をくっつける」のが定石である。

例：Aが、Bが～するのを見ていた

→ Bが～するのをAが見ていた

【3】 説明文は、判断文、品定め文（佐久間鼎^{かなえ}）とも呼ばれる。なんらかの主観的判断が加わる。説明文は有題文に分類される。現象文は、描写文、物語り文（佐久間鼎）とも呼ばれる。現象・事態について述べるだけなので、主観的判断が加わらない。現象文は無題文に分類される。

【4】 「主題」は「題目」とも呼ばれる。

【5】 「係助詞」は、学校文法では「副助詞」、日本語教育分野では「とりたて助詞」と呼ばれている。『基礎日本語文法 改訂版』（くろしお出版）では「提題助詞」と名付けている。